



Title	ハルトマン研究 : 『イーヴァイン』の文体を中心に
Author(s)	赤井, 慧爾
Citation	大阪大学, 1981, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/32921
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【 Ⅰ 】

氏 名・(本籍)	赤 井 懸 南
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	第 5 1 7 1 号
学位授与の日付	昭 和 56 年 2 月 27 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学 位 論 文 題 目	ハルトマン研究 ——『イーヴァイン』の文体を中心に——
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 片 山 良 展 (副査) 教 授 原 亨 吉 助教授 中 村 元 保

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中世ドイツの代表的叙事詩人のひとりハルトマン(Hartmann von Aue)の晩年の作『イーヴァイン』(Iwein)を対象として、その文体を、おもに同じ詩人の初期の大作『エーレク』(Erec)、必要に応じてその他の作品の文体と比較検討し、さらには『イーヴァイン』の手本と目されるクレチアン・ド・トロワ(Chrétien de Troyes)の『イヴァン』(Ivain)の古フランス語の文体をも参照しながら、ハルトマンの文体の特色とその発展を明らかにしようと試みたものである。本文は日本語で書かれ、400字詰496枚、これにタイプライター印字による、引用原文や比較対照表を含む後注および文献一覧を合わせると、全体で667枚に及ぶ力作である。

本論文は、ハルトマンの生涯と詩作の紹介を含む序論、二部に大別される本論、および検討結果をまとめた結論からなる。本論の構成と内容は以下のとおりである。

第一部「言語上の装飾」は二つの章からなり、第一章では主として「語」のレベルで、第二章では主として「文」のレベルで文体の諸相が検討されている。第二部「詩人ハルトマンの個性」は、第一章で「フモア」を、第二章で「教訓的な特質」を論ずる。

第一部第一章第一節「比喩的な表現」は論者がもっとも力を注いだ部分で、量的にも論文全体の四分の一近くを占める。内容は三項に分れ、その一の「直喩と隠喩」では、論者はヒュッティヒ(Ernst Hüttig)の分類に倣って、比喩形象を自然界に属するものと人間界に属するものとに大きく二分し、それをさらに細分した上で、『イーヴァイン』で使われている比喩形象がクレチアンのそれとどのように関連しているかを事例によって示し、また『エーレク』との関係については、それぞれの比喩形象の使用頻度を綿密に比較している。第二項の「提喩と換喩」、第三項の比喩表現が用いられる際の

文法形式の問題についても同様の検討を加えたのち、論者は、ハルトマンは概して自然界よりも人間界に強い興味を持っており、したがって彼独自の比喩のすぐれたものは人間に関するものの方に多いこと、『エーレク』から『イーヴァイン』への発展という観点から見ると、人間界に属する比喩が量的に増えていること、また質的には比喩が常套的なものから独自のものへ、外面的なものから内面的なものへの変化を示していること、さらにクレチアンとくらべると、ハルトマンの比喩には抽象的、理想的、教訓的な傾向が強いことなどを指摘している。

第二節「擬人法」では、『エーレク』にくらべると『イーヴァイン』ではハルトマン独自の擬人法、とくに「愛」(minne)、「理想」(wunsch)、「考え」(sin)、「苦しみ」(nôt)、「死」(tôt)など抽象的な概念の擬人法が増加し、文学的な効果も深まっていることが例示されている。

第三節では「誇張法と緩叙法」が検討され、これらの文体手段についても『イーヴァイン』に至って独自の表現が増加することが示されている。またそこでは誇張法を用いたたとえば婦人の美しさが描写されるくだりで、『エーレク』の類似の個所に比して、外面の美より内面の美が強調されている点などに、論者はハルトマンの人間的成長を見ている。

第四節「装飾の形容詞」では、論者はハルトマンとクレチアンを比較して、後者が具象的な形容詞を多用しているのに対して前者には一般的、抽象的な傾向が強いこと、また『エーレク』との比較では『イーヴァイン』において常套的な形容詞が減少していることを指摘している。

第五節「名前に添える言葉」でも、固有名詞の前後に添えられる常套的な同格名詞や形容詞が『イーヴァイン』で減っていることが頻度対照表によって示される。

第六節「一対の概念」で論者は、「夜一朝」(âbent — morgen)、「貧一富」(arm — rîch)などのような伝統的な文体手段の使用頻度を検討して、『イーヴァイン』においてハルトマン独自の組合せが増えていることを指摘し、ここにもハルトマンの創造的意欲と文学的發展がうかがえるとしている。

第七節では、語のレベルの文体手段の最後として、行頭に同じ単語を連ねる「首語句反復」の手法が考察される。これについてはハルトマンはクレチアンから学ぶところも多いが、ここでも論者は『イーヴァイン』においてこれが特に効果的に用いられていることを例示している。

第一部第二章第一節で論者は、語句や文を対立させて並べる「アンチテーゼ」と、その変種のひとつである「撞着語法」について考察し、中世的な二元的思考形式に照応するこれらの文体のあやを、ハルトマンは『エーレク』ですでに十分使いこなしているが、『イーヴァイン』ではさらにそれが洗練されていると論ずる。

第二節「隔行対話」では、この手法は『エーレク』の場合の方が華やかに用いられてはいるが、物語の状況への適合という点では『イーヴァイン』の方が優れていること、また、劇的な激しいやりとりを好むクレチアンに対して、より叙事的で控え目なハルトマンの対話の特徴、さらに作者自身が作中の対話に参加して、聴衆ないし読者を前にして一般的な省察を語るというハルトマンの教訓的な傾向が、『イーヴァイン』において顕著になっていることが指摘される。

第三節では「独白」がとりあげられ、ハルトマン得意のこの手法は、『イーヴァイン』ではクレチアンの原本の二倍以上用いられており、また『エーレク』のそれとくらべると、心理的に繊細なものに

なり、同時に教訓にあふれて、ハルトマンの人間的成熟をよく示していると述べられている。

第四節は、事件の予告やその結末の暗示、または以前に語られたことを思い出させる文体のあやを一括して「前後の事件の指示」としてとりあげ、これらのうち常套的なものの使用が『エーレク』にくらべて『イーヴァイン』では減り、指示の技法がより効果的になっていることを指摘する。

第五節は中世宮廷文学の重要な文体的特徴である「書き替え」(婉曲法)を扱い、ここでも『イーヴァイン』が、とりわけ人物の書き替えに優れていることを例示する。

第六節は、人物や事象の「記述」(描写)を扱い、まずおもにドルーベ(Herbert Drube)の研究を参照しながらクレチアンとハルトマンを比較し、前者の記述が詳細で具象的であるのに対してハルトマンの記述は暗示的、概括的であり、そのことと関連して前者は現在形を好み、後者は過去形を好むという、両者の違いを例示している。また『エーレク』と『イーヴァイン』とを比較すると、後者では記述が内面的、一般的な考察となる傾向が強いことを指摘している。

第七節では「激情の表出」が考察され、ハルトマンの両作品を比較して、この手法については『エーレク』の若くて情熱的な詩人と『イーヴァイン』の老成して冷静な詩人との相違が著しいことが指摘される。また論者はここで、クレチアンの感情的な表現とハルトマンの『イーヴァイン』の内省的な表現の対照にも言及している。

第八節は「一行文」に触れ、段落の初めまたは終りで出来事をまとめるこの手法が『イーヴァイン』では多用されて、物語の展開を明示するのに役立っていると述べる。

第二部第一章では、「フモーア」(Humor)の文体手段の観察を通してハルトマンの人柄を読みとろうとする試みがなされている。そこで論者は、出来事をありのままに具象的に語るクレチアンとはちがって、出来事をふり返り、みずからそれについて価値判断をくだして、聴衆ないし読者を教え導こうとするところに、ハルトマンのフモーアの源があると述べている。また『エーレク』から『イーヴァイン』への発展については、たとえば両作の冒頭場面の相違、すなわち前者の冷い戯れのイロニーから後者の温い思いやりのイロニーへの変化の中に、ハルトマンの人間的な成長を見ている。

第二部第二章では、論者はハルトマンの作品中に頻出する格言風の章句を丹念に拾いあげ、それらを比較検討して、ハルトマン固有の「教訓的な特質」が『イーヴァイン』においてもっともよく表われていることを示す。そしてここでは『エーレク』にくらべると、形式面では、常套的な表現形式が減っていること、内容面では、人生の英知が深まり、積極的、肯定的な提言が増え、「人間臭み」が強くなり、観察も深く温くなっている、ここに人間ハルトマンの円熟の境地を見ることができると論ずる。また、ここにもクレチアンの影響はあるが、ハルトマンの方が倫理的、理想的、教訓的であること、したがって作品そのものがより理念的、一般的な色彩を帯び、ここに詩人ハルトマンの特質がよくうかがえると述べている。

論文の審査結果の要旨

中世ドイツ文学を代表する宮廷叙事詩人としては、ハルトマンのほかにゴットフリート (Gottfried von Strassburg) とヴォルフラム (Wolfram von Eschenbach) が有名であるが、これらの詩人の作品のうちでは、ハルトマンのものがもっとも理想的かつ象徴的にいわゆるシュタウフェン時代の騎士的、宮廷的精神を表現しており、その中世高地ドイツ語はもっとも明快であるとされている。さらに最先輩である彼の作品が、前記の両詩人やその後の詩人たちに、内容、形式の両面にわたって与えた影響は大きい。このためハルトマンは中世ドイツ文学研究の好個の対象として、ドイツ語圏では古来あまたの学者によって、さまざまな観点から考察され論じられてきた。

本論文の論者がそこに焦点をしばった「文体」に関しても多くの研究成果が出ている。すなわちハルトマンの文体一般の研究としては、すでに前世紀末葉に出たシュムール (Carl Schmuhl), シェーンバハ (Anton E. Schönbach) らの著書、今世紀にはいつてはツヴィエルツィーナ (Konrad Zwierzina), ヴァイゼ (Wilhelm Weise), エーリスマン (Gustav Ehrismann), シュパルナーイ (Hendricus Sparnaay) らの研究があり、ほかに文体の各分野を扱ったものも多い。またハルトマンの文体と他作家の文体との比較研究としては、先行ドイツ詩人との関係ではレッテケン (Herbert Roetteken), 後継模倣者への関連ではイエスケ (Georg Jeske), さらにフランスの先駆者クレチアンとの関係では古くはドルーベの、最近ではクラマー (Hans-Peter Kramer) らの研究があり、それぞれ、ハルトマンがなにを受けとり、なにを与えたかを検討している。

しかし、ハルトマンの作品総体の内部で、成立年代を異にする個別作品を比較検討し、そこに見られる文体の変遷の観察を通してこの詩人の文学的、人間的成長を跡づけることを主要企図とした研究は、われわれの知るかぎりではこれまでに出ていない。この意味において、作品中の一語一句を周密に検討し、個々の文体手段の使用頻度なども考量しながら、ハルトマンの晩年の代表作『イーヴァイン』の文体を初期の大作『エーレク』その他の文体と丹念に比較した本論文は、ハルトマン研究に新知見を加えたものである。

副題が示すとおり『イーヴァイン』の「文体」の研究を中心とした本論文の内容からすれば、「ハルトマン研究」という主題目の立て方は一見広範に過ぎるように思われるかも知れない。しかしながら、論者は、序論の中でかなりの紙数を費して、最近までのドイツ語圏の研究成果にもとづいてハルトマンの生涯と作品を紹介しているだけでなく、本論中でも『エーレク』のほか、両長編叙事詩とはジャンルを異にし、成立時期からいえば両者の中間に位置づけられる『グレゴリウス』(Gregorius) や『あわれなハインリヒ』(Der arme Heinrich) などの作品にも随所で言及することによって、ハルトマン文学の全体像を浮び上らせることに成功している。相良守峯氏の『ドイツ中世叙事詩研究』で紹介された以外、ハルトマンの総合的研究にはほとんど手がつけられていないわが国の中世ドイツ文学研究にとって、この意味でも本論文の寄与するところは大きい。

本論文の弱点としてはつぎの諸点が挙げられる。

第一に、引例の豊富さに比して論者自身の行文がいささか平板かつ抽象的であること。すなわち、論者はハルトマンの文学的发展、人間的成長を跡づけることを目標とし、文体の諸相についていちいちこれを指摘しているのであるが、例語、例文そのものにそれを語らせようとする傾きが強く、自身の文章による肉づけが総じて控え目に過ぎるために、個所によってはハルトマンの「発展、成長」のイメージが必ずしも明確には盛り上らず、資料の取捨や分類整理に費やされた労苦が十分に生かされていない印象を与えるのが惜しまれる。

第二に、『イーヴァイン』とクレチアの『イヴァン』との関係が詳細に検討されているのに比して、『エーレク』の手本のひとつと考えられるクレチアの『エレックとエニード』(Erec et Enide) についての言及が乏しいことが問題点として指摘されよう。

しかしながら、先に述べた本論文の功績は、これらの弱点を補うに足るものであり、かつ本論文に示された論者の力量をもってすれば、第一の弱点は若干の論述の工夫により、第二の弱点は今後の研究により、いずれも容易に補正ないし補完されるであろう。

以上により、本論文を文学博士の学位請求論文として十分な価値を有するものと判定する。